

利用者の声

アジア歴史資料センターと高校歴史教育 —教育現場からの提言—

北海道当別高等学校・北海道大学 吉嶺 茂樹



1. はじめに

筆者に与えられたテーマは、地方の高校において歴史教育に携わっている者にとって、アジア歴史資料センター（以下、アジ歴と略す）のデジタルアーカイヴが、どのような意味を持つのかについて提言をして欲しい、というものである。現在筆者は、いわゆる困難校で現場に立ちながら、高校教員免許取得をめざす大学生に教育法を担当している。また3年前からアジ歴の担当官と連携して、北海道で高校の歴史教育にあたる教員や、教員をめざす大学生に対してのセミナーを企画運営してきた。¹ 本稿では、こうした経験をふまつつ、歴史教育におけるアジ歴史料の可能性について述べてみたい。

2. WEB史料をつかった「正解の無い」授業

昨年後半のいわゆる「履修漏れ」問題は記憶にあたらしいことであろう。かつて、これほど歴史教育が大きな国民的問題になったことは、実はこれまでなかったのではないかと、というふうに筆者は考えている。² この問題の原因を受験の問題一つに帰することはもちろんできない。しかし、高校全体の数ではそれほど大きな数ではないものの、その多くが進学校の生徒に関わる問題だったために、これだけ社会の関心を集めたのである。実際、今年度後期に筆者が大学で授業（前期の授業は免許取得に必修であるが、後期の授業は必修ではない）を担当している学生7名のうち、1名を除く全員が何らかの形でそれぞれの高校時代に、今回の未履修問題に関わる必修教科の不足があった。地理歴史科の教員をめざす学生の出身校ですらこうである。つまり20年後に日本社会の指導的な地位につく、偏差値の高い大学生の多数が、世界史や近代史

¹ この時の研究会の状況は記録として公開している。「北海道高等学校日本史教育研究会会報」21号（2004.1）。なおこの記録は、将来講演記録集として公開の予定である。

² もちろん、80年代にはいわゆる教科書問題があり、特に近代史の教科書記述に関わって、アジア諸国が日本の教科書検定のあり方について厳しい指摘を行った。また、本センターが設立されるきっかけとなったいわゆる「村山談話」も、アジア諸国と日本の歴史認識の違いをどのようにして埋めていくか、ということについての政府側からの貴重な発言であると筆者は考えている。しかし、上述したような問題は、実際には日本国民の大部分が大きな関心を持ち、しかも「自分の子どもが直接関わる」問題であったわけではない。

に関する基本的な関心や知識を持たないで社会に出ていくことになる。しかも、重要なことは、その原因は彼ら学生諸君には全く無いということである。彼らは学校の指導に素直にしたがっただけである。どうしてこういうことがおきたのだろうか。

実はこの問題が現在の歴史教育の抱える問題点を象徴している。4年前まで筆者は北海道内有数の進学校に勤務していたが、進学校において、歴史の授業は、「できればやらずに済ませ」「最低の分量で終わらせたい」教科になっているのである。その理由は、受験に関わって主要教科を中心に効率よい指導をしなければならない進学校の教員にとって、歴史、特に近代史に関わる事項は、覚える量が莫大であり、しかも入試で何が出るかは分からず誠に効率が悪い。加えて、受験で必要ない生徒に対しては、限られた授業時数で受験に関係ない教科までやる時間とヒマは無い、ということなのである。

しかし、歴史を学ぶということは、受験に関わりなく、生徒の思考訓練の教科としてきわめて優れていると筆者は思う。様々な時代背景の中で、無数の可能性の中から、なぜその政策が選ばれ、どのようにして具体的な政策となり、そしてそれが後世にどのような影響を与えたのか、を後の世代から俯瞰的に考えることは、むしろ将来の社会のリーダーたちを多く教育している進学校において行われるべきではないだろうか。それに何より、自分の手で史料を選び、読み、考える作業はやってみると実に面白いのである。

そして、そのような実物史料を元にした近代史の授業は、むしろ「現状では受験にそれほど必要無い教科」とされてしまった日本史や世界史の授業で可能なのである。アジ歴の膨大なWEB史料を活用すれば、生徒一人一人が、自分の関心にしがって、自ら歴史の史料にアクセスし、それをプリントアウトし、実際に手触り感をもって眺めることが可能なのである。こうした授業に「正解」はない。しかし、我々歴史教育に関わる教員は、このような「正解の無い」授業を共に考えていく姿勢をもつことからしか、受験から外された中で生徒に歴史、特に近代史を語っていくことはできないのではないかと。そして、そのことによって逆に、歴史を考えることは面白い、と、特に「歴史嫌い」の生徒に伝えていくことが必要なのではないだろうか。なぜなら、筆者が現任校で接している生徒の大部分が、中学時代、高校入試を突破することを目的とした暗記を重視する授業に乗り切れなかったがゆえに「歴史は大嫌い」だからである。歴史が大嫌いな生徒に一年間授業を語るためには、まずは「面白い」と思わせ、授業で座ってもらうことから始めるしかない。

しかし、勤務校の生徒達を相手に授業を行ってみて、本来歴史は、自ら自由に史料を見て考えることができる、解釈することができるものであることが分かってくると、そのことによって生徒達にも歴史を考えるおもしろさを取り戻すことができるのではないかと、と思う。まさに昨年末に開催されたアジ歴主催のセミナーは「歴史が蘇る」がテーマであった。先述したように、高校生のみならず、実は高校教育にあたる他教科の教員間にあっても、歴史教育は暗記が中心で面白くなく、限られた時間の中で歴

史教育などにかかる時間は出来るだけ手短に済ませようと言う声は強いのである。その結果が、特に理科系の生徒に対する世界史科目の履修漏れ（教育する側からすれば履修逃れという方が正確である）であろう。

もちろん、歴史に関わる授業であるから、勝手な解釈は厳に慎まなければならない。特に授業で活用するにあたって、史料分析に関する専門的なトレーニングを受ける時間的精神的余裕は現場の教員にはほとんど無いのが実態であろう。その際に、本WEBサイト上で公開されている「特別展」の試みは貴重である。膨大な史料の山の中から、あるテーマにしたがって的確な史料がリンクされ、その解説も丁寧に行われている。さらに、近代史を授業で取り扱う上で、写真資料の果たす役割は大変大きいのであるが、特別展サイトではこうした写真史料や地図に対しても十分な説明が加えられている。しかもそれがWEB上で継続的に保存されており、教員はいつでも必要な授業で、プロジェクターや紙媒体を使って生徒にこれを示すことが出来るようになったのである。筆者がコンピュータを使うようになったのは教育現場に出る直前であるから、今年で22年になる。彼我の差は大きく、ここまで教室で出来るような時代が来たのか、という思いが強い。

3. 「実物で語らせる」ことの大切さ

ところで、特に地方で歴史教育にあたる場合、大きな問題点は、教員や生徒が教科書に載っているような実物史料にあたるのが困難である、ということがあった³ 東京と地方、北海道でいえば、札幌とそれ以外の地域との情報の差は大変大きかった。実物教材が生徒に与えるインパクトは大きい。やはり歴史の授業は、できるだけ「実物で語らせる」ことが大切なのである。実際にかつて筆者も何度か国立公文書館、外交資料館に史料調査に赴いたことがあり、その際には、館内に展示されている史料や写真を使って授業ができれば生きてくることがたくさんあると痛感した。

平成15年秋、大濱徹也氏（元筑波大学教授・国立公文書館）村田文江氏（北海道教育大学岩見沢校教授）の御紹介により、瀬野清水研究官（当時）・牟田昌平研究官との書簡・電子メールによるやりとりが始まり、16年3月、アジ歴のご厚意により、上記研究官お二方の参加の下、北海道大学において高校教員・大学生に対するセミナーを開催することが出来た。その際参加した教員の中から、毎年夏に札幌で開催している高校教員の研究会で報告をしていただき広く授業に活用できるようなセミナーを開催してはどうか、という声上がり、同年の夏に再度札幌でセミナーを開催することができた。その際、参加した教員、特に若手の教員からの最大の声は、このセンターの活用により地方と東京との距離感が無くなること、地方にしながら歴史教科書に掲載されている史料が手元で自由に使えることに対する驚きと感謝の声であった。加え

³ 高校歴史教育と実物教材の問題については本稿では紙幅の関係で詳述出来ない。以下の文献を参照されたい。宮内正勝他『手に取る日本史教材（正・族）』、綿引弘『手に取る世界史教材』（いづれも地歴社）。

て物理的な条件整備も大きい。現在北海道では、IT関連予算を使い、全高等学校の全教室に高速LAN回線が開通しており、教員が機材を教室に持ち込む手間を厭わなければ、本WEB上の史料を使っていつでも教室で授業ができる条件が整備されているのである。

今一点、この10月に開始された新しい検索システムについてコメントしておきたい。筆者は実際に両者を比較して利用してみたが、新しい検索システムの使い勝手は以前に比べて格段に上がったと思う。例えばキーワード検索システムの使い勝手が大変良くなった。ビューワーのシステムや拡大縮小、他のページや史料へのジャンプなども細かく改良されており、以前から本資料を使って授業を行っている者にとっては「誠にかゆいところに手が届いた」改良であったと思う。WEB上の「特別展」保存にもさらに工夫がされていることもありがたい。上述したように、生徒に調べさせる授業ももちろん大切であるが、時数上そのような授業が出来ない学校においても、この企画展を映し出すだけで、教科書の記載がより具体的にイメージできるのではないか。実際に筆者の授業（日本史）で、教科書に出てくる人物の「顔写真」と「書」（サインや花押を含む）を比較対照した授業を行ったが、特に書道選択者から積極的な反応があり、それに他の生徒がからむ形で授業が成立し実に面白い授業になった。本稿をお読みの高校現場の先生方も、ぜひ実際に行ってみられてはいかがだろうか。

4. おわりに

以上、本センターの史料を授業で活用してみた感想や本センターに対する思いを述べてみた。「はじめに」で書いたように、これほど「歴史教育」が国民の注目を集めている時代はない。我々高校の歴史教育に関わる教員が毎時間どういう授業をやっているのか、が保護者や社会の厳しい目に注目されているのである。新聞報道等によれば、今回の「履修漏れ」を受け、保護者と教育委員会が協力し、年間授業計画と毎時間の教員の授業の整合性や定期考査、さらには時間割とカリキュラムのチェックまでが想定されているという。しかし、どのような状況になったとしても、基本は「生徒と教員」であろう。我々高校教員は、歴史に関わって何を、どう「教える」のか。生徒にとって「興味深い」授業とは何か。このようなことを考えていく上で、まずは、「史料に向き合う」姿勢が問われることは論を待たない。やはり、「実物」は面白い。そうした意味で、特に近代史の授業改善において本センターの役割はますます大きくなっていくであろうし、それを活用する我々がどういう「授業プラン」を積み上げていくのかが問われていると思う。「特別展」に対する高校教員からのアイデアも必要であろう。今後そうした試みに筆者も積極的に関わっていきたいと考えている。

吉嶺 茂樹（よしみね しげき）：熊本大学大学院文学研究科史学専攻（西洋史）修了。現在、北海道当別高等学校教諭、北海道大学教育学部併任講師。